

妊娠と乳がん。二つの命と向き合った女性の決断。

妊娠5ヶ月の身重で、医師から突然「乳がん」であることを宣告されたら、あなたならどうするでしょうか？ それも病名は、トリプルネガティブという悪性度の高い進行がんです。今回は、出産とがん治療という二つの難問に直面した女性のお話です。この物語を読んだら、あなたはきっと「奇跡」が起きるのを信じるしかないと思うでしょう。

中部地方に住む30代の女性・

Kさんは、2021年6月、妊婦健診に訪れた病院の医師から突然、こう切り出されます。

「胸に大きなしこりがあります。乳がんです」

頭を殴られたような衝撃でした。Kさんは二人目の子どもを妊娠しており、当時5ヶ月。順当なら定期期に入るところです。医師は「(がんは)3・2センチほどの大きさで、リンパ節転移の可能性があると告げ、大きな病院ですぐに検診を受けるようすすめます。

おそらく生きてきた心地がしな

かったでしょう。一人目の子どもは1歳半になったばかり。まだ手がかかる上、二人目の出産と乳がんの二つの試練と向き合うことになったのです。

「このまま病気が進行したら私とお腹の子はどうなってしまうのだろうか…」

Kさんは、すぐに実家の母親に相談します。Kさんのお母さんは医療従事者でした。実はお母さんの存在が、のちのちKさんの大きな力になるのですが、この時は「頭の中が真っ白になった」と振り返ります。現場で

たくさんのがん患者さんを診

てきたものの、まさか自分の娘にふりかかるとは予想もしなかったかもしれません。

「本人には言えませんが、娘の命に関わる問題ですから状況によって子どもは諦めざるを得ないと思いました。ただ中期中絶するにしても、タイムリミットは22週未満ですから時間がありません。ほんとうに難しい判断であり、決断だったと思います」

娘の気持ちを、お母さんはそう代弁します。それから約1ヶ月後、Kさんは大学病院で正式な診断を受けます。その結果、Kさんの病期は「ステージ2b」で、トリプルネガティブという、いわゆる悪性度の高い進行性の乳がんでした。

トリプルネガティブは、乳がん特有のホルモン受容体などがないため、一般的に治療効果が期待できるのは抗がん剤のみに限られます。そのため治療に難渋するケースが多く、抗がん剤による副作用に苦しむ患者が多いのが現状です。

通常ならリンパ節に転移が見

られ、進行すれば間違いなくKさんや子どもに命に関わっていったでしょう。



あきやま しんいちろう
秋山 真一郎

医師・医学博士、カナダマギル大学臨床腫瘍学客員教授。NPO法人がんコントロール協会理事。がん免疫治療と植物栄養素を中心とした免疫栄養療法など、副作用のない多角的療法で成果を上げている。

しかしKさんは、「産む」ことを決断します。理由は「リンパ節に、がんは転移していない」からでした。なぜ転移がなかったかわかりません。ただ確定診断が出るまでの約1ヶ月、Kさんはお母さんの勧めで徹底した食事の見直しと栄養療法を続けていました。体調もすこぶる良く、そのことと無関係ではないと感じていました。それでもこの段階で決断するのは、極めてリスクが高いと思います。果たしてKさんは無事、出産することができたのでしょうか？

詳細は、次号でお伝えします。

